

## 集学的治療により長期生存が得られた小細胞肺癌の 2 例

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院 臨床工学科 大田真

共同演者

臨床工学科 垣下ひかる、樋口優子、川崎玲

放射線科 森岡文明、鞆田義士、成定宏之、今田肇

### 【症例 1】

70 歳男性。2010 年 11 月に乾性咳嗽あり精査の結果、SCLC (T4N2M0) と診断。翌年 1 月、当院受診し温熱化学放射線治療に高気圧酸素治療 (HBOT) を加えた集学的治療を開始し、腫瘍の著明な縮小と腫瘍マーカーの正常化がみられるも、2012 年 4 月に突然の心肺停止を来し、後の精査の結果、異型狭心症と診断され内科的治療の為、がん集学的治療は休止となる。

2012 年 10 月、33mm の転移性肝腫瘍出現し治療再開。

現在、肝臓に対し温熱化学療法を実施し、原発巣は CR の状態で制御されている。

### 【症例 2】

63 歳女性。2010 年 4 月、前医にて SCLC (T4N3M1a) と診断され CPT-11/CDDP 施行し PR となるも本人様希望にて治療休止。

2011 年 1 月に増悪し当院受診。温熱化学放射線治療に HBOT を加えた集学的治療を開始し、PR が得られるも本人様希望で治療休止。

その後も肺・後腹膜リンパ節への再発・転移を来すも温熱化学放射線治療により、初発時より 4 年が経過した現在においても PS レベル 1 の状態で治療継続中。

### 【考察】

SCLC は予後不良であるが、本症例は適切なタイミングで集学的治療を行う事で長期生存が可能となった。

症例 1 では同薬剤を 3 年使用しており、温熱治療による薬剤耐性遅延効果が示唆された。

遠隔転移が生じた例においても、広範な病巣でなければ、化学療法だけでなく、放射線治療や温熱治療といった局所治療の負荷がその後の予後を改善する可能性が示唆された。

### 【結語】

温熱化学放射線治療により制御可能な小細胞肺がんの 2 例を経験したので報告した。